

2019 年度日本語教育実習 最終レポート

三年間の日本語教育の授業を終えて、日本語教員養成課程の授業をとっていなかったら、人前で話す経験が得られなかったと思っている。入学直後の日本語教育についての説明会で興味を持ち、養成課程の授業を取ることにした。とても不安な中、三年生の実習を迎えたが、やりきることができて嬉しかった。実習の準備は、先生やメンバーとの支えでできたものだ。YMCA の実習授業では、マイクロティーチングがあることで、先生とメンバーの人に見てもらい、本番に備えることができた。このリハーサルは私にとって、とても重要なものだった。YMCA での実習授業では、1 回目は授業が終わるまで緊張が解けなかった。しかし、2・3 回目は緊張していたが、普通どおりの気持ちで授業ができた。数をこなすことで、出来ない事が少しずつ出来るようになっていくことを実感できた。

日本語の実習授業と日本人相手の授業では、「説明する言葉に限られている」という違いがある。質問の仕方や言葉の説明次第で、学習者は答えにくくなったり、理解しづらくなったりする。どんな言葉を使っていいかわからないのであれば、教案に教師の発言を予め書いておくといい、ということを知った。初級者の場合、簡単な文の使用や絵などの視覚教材の使用が理解を助けてくれる。

実習ではうなずいてくれたり、「分かりましたか？」と聞くと「はい」とすぐ答えてくれたりしたので、嬉しかった。日本語教育の現場では、発言している学習者がたくさんいて声の大きさも倍で返ってくるので、それに負けないように自分を奮い立たせようとした。日本語を学びたいと熱心に思っている学習者は、教師の方を常に見ていて、よく目が合う。実習授業をやりきれのかと思っていたけど、学習者たちのサポートによって、最後まで授業をすることができた。「一人で授業するのではなく、みんなで授業を作っていくのだな」と実習授業中に感じるがあった。ある学習者が答えを間違った時に、周りの学習者が正しい答えを言ったり、なんで違うのかを一生懸命伝えたりしていた。自分の言葉で伝えられる嬉しさがあるのだと思った。私も英語で説明してわかったくれた時は、とてもうれしくなって、もっと英語を学びたいと思う気持ちが高まり英語が好きになる。実習授業のグループワークで言い間違えた時に、自分で気づいている学習者もいた。自由に話し合うディスカッション・タイムでは、授業で習っていない言葉を避けて他の言葉で説明したりジェスチャーを用いたりして、会話ができた。

1.2 年生と 3 年生の授業や DVD を比較して、「変わった」と思ったことが四つある。一つ目は、文字・絵カードの使い方だ。初めは紙の大きさや重さ、言葉を言うタイミングが掴めなかった。けれど、実習授業では、生徒に見やすいように位置を上の方に上げたり、スムーズに文字や絵を見せたりして、説明することができたと思う。学習者目線になって教えることが大切なのだ。「誰かのために、どういうことをしたらいいか」を考えながら行動していきたい。

二つ目は、どんな授業にしたいかを考えるようになったことだ。いい授業とは何かにつ

いて考える授業があり、T先生の英語の授業や先輩たちの授業、日本語教育の授業を見て学ぶ機会があった。これらの体験によって、どんな授業にしたいかを決めて授業を行うことが大事だということを学んだ。「ただやるだけでなく、自分の直したいところや成長させたいところを意識して、行動すること」が大切なのである。私は練習通りにスムーズに授業を進め、声を出すことを目標にしていた。それは、2年の授業で文字カードや教案づくりをして発表する時に「多様性がない」「声の小ささが原因で、淡々としている」などの意見もらったからである。そこで、YMCAの授業ではまず、大きな声を出して授業内容が理解できるようにしたいという目標を立てた。そしていい授業をするために、発言する場を作り主体性があり楽しい授業にしたいと思った。外国人学習者にとって、ためになる授業をすることを第一に考え、教材の字を見やすくしたり、ゆっくり話したりした。

三つ目は、「姿勢が悪く元気がなさそうに感じる」という欠点の克服である。前期で中国人に授業をしたときの私の見た目と、YMCAの実習の方を比べると、姿勢がずいぶん良くなっていた。教壇に立つ教師はみんなに見られているので、猫背だと明るさがないと感じる学習者が多いのではないかと思う。就職活動の面接や普段の姿勢を意識して、見た目の印象を良くしていきたい。

四つ目は、学習者の発話に対するフィードバックである。3年の前期で中国人とトピックについて会話をする授業内容では、会話をしつつ間違いを見つけフィードバックするのがとても難しく、フィードバックを早くスムーズに行うことがうまくできなかった。YMCAの授業では、すぐ間違いに気づきアドバイスを伝えることが出来たと思う。

私は日本語教員にはならず就職しようと考えている。実際に外国人に日本語を教えることがこれからあるかどうかは分からないが、日本語を学んでいる外国人を見かけたら日本や相手の出身国について話してみたいと思う。教育実習を無事に終わることを一番の目標としていた私は、それに必要な授業のやり方やいい授業などを学んできた。日本語の授業では、いろんな教師がいていろんな授業が存在しているのだなと思った。他の実習生の授業は、個性があり生徒を巻き込んだり生徒と会話をしたりして、楽しく面白くて盛り上がりがあった。メリハリのある授業だなと感じ、雰囲気が一気によくなったと見ていて思った。今後活かしていきたいことは、スムーズに話せない時の言動だ。学校の発表の時や就職活動の面接、初めての人と会っていく中で、「困ると声のトーンが低くなる」等の癖をなくしていきたいと思う。そして、緊張して自分の思い描いたことができないことが多いので、緊張する場面を自らつくって、練習を人に見てもらい、満足のいく内容にしていければと思っている。目標を立ててその思いが強くないと体が動かないと思うので、なぜその目標にしたのかを考え成長していきたい。私の抱負は、自信をつけることだ。緊張する場面において、より緊張してしまうことがあり、それを克服したいからだ。相手に不安な要素を見せないようにし、そのためいろんな人と話したり大勢の前で発表する経験をしたりして、話すことに抵抗を失くしていきたい。日本語教員養成課程での経験、特に日本語教育実習での様々な体験を、今後活かしていきたい。